

「一粒の麦のよう」(ヨハネ二二・二〇～二八)

1 心騒ぐ

受難節第四主日です。十字架への道を歩むイエス・キリストを見つめながらこの季節を私どもは過ごしています。

およそ三三年の生涯をおくったイエスですが、福音書が伝えているのは、その最後の、短くとって一年間、ヨハネによる福音書によれば三年間のことです。最後に彼はエルサレムで十字架刑に処せられる。その経過についていまは何も申し上げることをしませんけれど、今日の聖書箇所は、その最後の日々、エルサレムでなお多くを語られたイエスの言葉の一部です。

ところで十字架への道を歩むイエスについて、イエスは神の子であり、メシアとして神から与えられた使命も自覚していて、したがって彼は何の迷いもなく御心にしたがい、十字架への道を、苦難の道を歩んで行かれたと、漠然と考えている向きもあるいはあるかも知れません。しかし決してそうではないのです。今日の箇所もそれを垣間見させてくれます。

今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。「父よ、わたしをこの時から救ってください」と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ・・・(二七節)。

このところは、他の福音書にはあつて、ヨハネにはないイエスのゲッセマネの祈りの場面を思い起こさせるものです。むしろヨハネによる福音書のゲッセマネの祈りといつてよい箇所です。

「わたしは心騒ぐ」といっています。福音書はほかにイエスの人間としての側面としてたとえば涙を流すイエス、憤るイエス、喜ぶイエスなどを伝えていきます。「心騒ぐ」とは、恐れる、動揺する、困惑するなどの意味です。マタイでは「わたしは死ぬばかりに悲しい」とあります。

このイエスの「苦しみもだえ」る姿(ルカ二二・四四)は、死に対する恐れを示すだけではありません。十字架の死という予想される結末が、はたして神の御心であるのか、正しいものなのか、避けられないものなのか、それ以外の救いの道はないのかという、メシアとしての問いであり、神に問い自分に問う中でなされている一つの戦いなのです。人の子イエスは、いま見透すことのできない暗やみの中にあつた、それを前にしていたのです。

しかしイエスはそうして問いに、そうした暗やみにとどまっていなかった。イエスは直ちにこういいます、そうではない、「わたしはまさにこの時のために来たのだ」と。聖書が、動揺するイエスの心の内側について沈黙せずに語ったということ、それはそれで重要なことです。しかしそれ以上に重要なことは、聖書がイエスの内面を語ることを越えて、決定的なことを語ったということです。イエスがしたこと、イエス

が神の御心に従ったこと、かくて救いが成就されたことを語ったのです。

メシアであるイエスの歩みはこうして最後の段階に入ります。「わたしはまさにこの時のために来たのだ」。このはっきりした言葉とともにキリスト・イエスは十字架への道を歩みつづけます。

2 すべての人を照らす光

さてイエスが「わたしはまさにこの時のために来たのだ」といった「この時」、神が栄光を現す時、それにより人の子イエスが栄光を受ける時、もう少し具体的にいえば、イエスが十字架につけられ、死人のうちより甦り、神のみもとに帰るその時、救いの時の来たことを、メシアとしての道が最終段階に入ったことを、イエスはどのようにして知ることになったのでしょうか。

こう問うことによって私どもは今日の箇所のはじめに戻るよう求められます。イエスが、自分の時、すなわち、十字架への道を歩む、その決意をした出来事に帰るよう求められます。

さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上ってきた人びとの中に、何人かのギリシア人がいた。彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとに来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た」（二〇～二三節）。

場所はエルサレムです。状況はというと、過越の祭りです。毎年春に行われる出エジプトを記念する祭りです。ユダヤ最大の祭りとして世界中からユダヤ人が、またユダヤ教徒が巡礼のため集まってきたのです。「何人かのギリシア人」がいたとあります。外国人でユダヤ教徒になった人か、それともギリシア人か、どちらかです。おそらく前者です。彼らがイエスを訪ねてきた。

「イエスにお目にかかりたい」とは、信じたい、イエスの救いにあずかりたいと意味だと理解されています。彼らが最初にフィリポのところに行ったのも、フィリポがガリラヤ出身で、異邦人と接触のある地域の人だからだ、と言われています。救いを願う彼らの気持ちは本気だったと思います。

彼ら異邦人（外国人）が訪ねて来たことが、イエスに、時が来たことを知らせたのです。神の救いは、人の子イエスによっていまなされる神の救いは、ユダヤ人だけでなく、外国人も、すべての人に及ぶ。ギリシア人が来たことが時のしるしでした。彼らを通して神はその時を明らかにしたのでした。

イエス・キリストの救いはすべての人に及ぶ、だれひとり除外されていない。それはこの福音書のはじめから明らかにされている、私どもが決して聞きのがしてならないメッセージです。ギリシア人の来訪は、救いの時が来つつあることを明らかに示したのです。

この福音書を振り返ってみれば、第一章にすでに「その光は、まことの光で、世に来て、すべての人を照らす」とありました。「すべての人」を照らすのです。どうしてこのすべての人の中にユダヤ人でない人が入っていないことがあるのでしょうか。どうしてそこに、律法を与えられた人たちだけ、律法を守る人だけというような特殊な条件が入り込む余地があるのでしょうか。

さらに有名な三章一六節には、イエスの言葉として、神はその独り子をお与えになつたほどに世を愛された、御子が遣わされたのは、世を裁くためではなく世が救われるためであると書いています。「世が救われるため」、世とは私どもすべての人間のことです。

もう一つあげておきましょう。イエスは良き羊飼いととしての自らの使命をこう語っています。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」(一〇・一六)。ギリシア人が訪ねてきたことは、十字架の救いの広がりを取引するものとして、その時が来たことを、イエスに明らかにするものでした。

十字架の救いとは、それなら何でしょうか。有名な比喻をもって、イエスは明らかにしています。

はつきり言うておく。一粒の麦は地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ(二四節)。

イエスはこれによつてご自身の十字架の死と、それによつてもたらされる豊かな実りを語っています。十字架の死は、多くの人に命を与えるというのです。イエスの死によつてでなければ真の命はもたらされない。真の命とは、私どもが神とともに生きる命です。

十字架で起こっていることを、今日は私は、交換、取り替えという言葉で説明してみたいと思います。十字架の死によつて、神は、人のものを、つまり罪と死を自分のものとして引き受け、代わりに、神のものを、真の命を、人に、私どもに与えてくださったのです。

罪なきイエスが十字架にかけられたとき、そのことは起こりました。彼が人の罪とその報いとしての死を引き受け、私どもが、イエスによつて神の命にあずかることが許されたのです。イエスが一粒の麦のように、地に落ちて、死に、それによつてはじめて種の中に隠されていた真の命は私どものものとされたのです。ここにすべての人のための救い、世の救いがあります。

3 一粒の麦のよつこ

さて今日の聖書で、とくに重要なことは、一粒の麦としてのイエスの在り方がそのまま私どもの在り方、教会の在り方として語られていることです。

自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命にいたる。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください(二五〜二六節)。

これらの言葉は私どもに対する、教会に対する教え、勧めです。その根底には一粒の麦としてのイエスの生き方があります。

かく勧められる私どもはじっさいどうなのでしょう。イエスと同じように自分の命を愛することをせず、かえってこれを憎むというようなことは、どういできない存在です。しかしそういう私どもにも、そのまま、イエスに仕え、イエスに従うことが、ここで許され、求められます。仕え、従う者とイエスはともにおられ、そのような者を神は愛してください。神が私どもとともにいてくださる。それは私どもが永遠の命にあずかることです。

二世紀の殉教者に、アンテイオキアのイグナテイオス(30/35-107/17)という人がいます。イエスが十字架につけられた頃生まれ、紀元一〇七年頃、八〇歳近くになって殉教しています。彼が書いた七つの手紙の一つ『ローマ人へ』で、次のように書いています。「ただキリスト者と呼ばれるだけではなく、そのように振る舞う・・・わたしが苦難を受ける時、わたしは、イエス・キリストにあつて解放され、キリストとともに自由な者としてよみがえるでしょう。・・・わたしは神の穀物であつて、獣の歯でかみ砕かれることにより、キリストの純粋なパンとして、自分自身を差し出すのです」。獣の歯でかみ砕かれというのは野獣に投げられる判決を受けたからです。「わたしは神の穀物」というのは「一粒の麦」になぞらえていつているのです。彼も死んで豊かな実りをもたらした。

今日をはじめに、イエスは神の子だからはじめから揺るがない確信をもつて十字架に突き進んでいったということではないのではないかと述べてみました。このイエスに従い、一粒の麦のような歩みを志している私どもも、教会も同じです。心騒がせながらも、御心を尋ねもとめながら私どもは歩みます。

私どもも暗やみの中を、見透せない闇の中を歩むときがあります。トンネルのような闇ではない。その間だけ目をつぶっていけば向こうに出口がある、そういう暗やみではない、メシアとしてイエスが直面したのは、トンネルとは違う、見透すことのできない暗やみでした。

しかしその中でもイエスは、神の道に従っていった。神の示すところに従って行った。それゆえそれは、一粒の麦であるイエスに従う私どもの、そして教会の歩みでもなければなりません。御心なれかしと祈りながら、イエスの歩んだ道を、私どもも歩いてゆくことができるなら、どんなに幸いなことかと思えます。

(二〇一九年三月三十一日)